

「日本一」の紅花 摘み取りに汗

白鷹・荒砥高生が農家手伝い

白鷹町が生産量日本一を誇る紅花が見頃を迎え、地元の荒砥高(地主佳子校長、59人)の全校生徒が7日、同町十王の畑で摘み取りのボランティア活動を行った。

白いゴム手袋に長靴姿の生徒たちは、所有する安部武さん(76)から摘み取り方の説明を受け、約30㍎の畑に展開。畝の間を進む際には紅花のとげが当たって「痛い」と悲鳴が上がった。蒸し暑さの中、汗を拭いながら作業に励み、終える頃には手袋が黄色に染まっていた。初めて体験した3年遠藤蓮華さん(17)は



紅花の摘み取り作業を行う荒砥高生＝白鷹町十王

摘む花の見極めに苦戦しつつ「景色がきれい楽しい。(とげの)痛みは気にならなくなった」と話していた。

この日は1時間足らずで約8㍎を集めた。安部さんによると、いつもは数人がかりで1日2㍎ほどの収量だといひ「これだけ集まれ

ば大助かり」と喜んでいた。摘み取った紅花は染料となる紅餅などに加工されるといふ。

町は紅花に親しんでもらうことや農家の摘み手不足解消を目的に、町内の小中高校に摘み取り作業への協力を依頼している。荒砥高では2019年からスタートし、20年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止、21年は1、3年生で行った。現地では暑さ対策として適宜マスクを外すよう指導した。(上妻大晃)